

成人女性の生涯発達理論に関する省察

- 30代シングル女性の課題を中心に -

宇都宮 真輝

Reflections on Life-Span Developmental Theories of Women - Focusing on Single Women Mainly in Thirties -

Maki UTSUNOMIYA

Abstract

This paper is to reflect on the developmental processes and tasks of single women aged from around 32 to 43. There are three researchers, Levinson, Josselson, Sheehy, who studied the developmental processes of women in detail. Their studies concerning the period show that it is not easy and often a time of unwelcomed instability and uncertainty for most women.

In this period, the three researchers argue, most women feel a need to revise their life structure and impelled to make major changes in central components. Furthermore, in their middle thirties, most single women feel that they are in a hard place both matrimonially and occupationally. In addition, the women feel a need to revise their present choice in the domain of relationship and occupation.

According to the researchers, in general, this period is a time of great difficulty, but also great personal growth and development for most women. By the next period, whatever their life patterns, they need to have a time of inner questioning of love, marriage, family and work.

Key words : identity, thirties, single woman, developmental process, lifecycle

キーワード : アイデンティティ、30代、シングル女性、発達課題、ライフサイクル

1. 問題意識と目的

アイデンティティ研究は Erikson (1950) の研究に端を発するが、その後、研究の中心的なテーマであった青年期の発達課題から、成人期の発達プロセスへと徐々に関心が向けられるようになった。その背景には、長寿化にともなうライフサイクルの変化や、時代の変化にともなう生き方や価値観の多様化など、成人期のあり方や捉え方が大きく変化したことなども関係していると思われる。

1970年代に Levinson (1978) が成人期の発達プロセスについての質的研究を行って以来、成人期の発達研究はますます広がり、女性研究者らによる女性特有の生涯発達に注目した研究なども盛んに行われるようになった。Josselson (1973) や Sheehy (1973) また岡本 (1994) など、女性研究者らがおこなったインタビュー調査からは、選択したライフ・スタイルの相違がアイデンティティ形成に深く関与していること、女性には関係性を重視したアイデンティ

ティ発達の特徴があることなど、女性特有の発達の視点なども指摘されるようになった。

それに加え、昨今では晩婚化、未婚化、非婚化などといわれるように、成人期を長くシングルで過ごす人々やシングルという生き方を選択する人たちも増えてきた。日本では少子化の問題とも相まって、「30代シングル女性」が注目を浴びることも多い。そういった背景から、最近ではシングルに目を向けた研究も徐々に増えつつあるが、代表的な先行研究においては30代は女性にとって結婚・出産を伴った発達プロセスが挙げられることが多く、その時期のシングル女性についてまだ多くは語られていない。

筆者は数年前、先行研究ではあまり注目されていなかった「30歳移行期」のシングル女性を取り上げ、そのアイデンティティ形成のプロセスの実態を研究調査した(宇都宮, 2005)。本格的な成人期へと移行する際のシングル女性が、どのようにその一歩を踏み出し、また多くの移行期に伴うと考えられる「危機・転機」を乗り越えているのかを調査するためである。

その結果からは、Josselson (1973) のいう「女性は親密な関係をもつことでアイデンティティがより確かになる」という指摘や、岡本(1994)のいう「個と関係性の視点」、また「ライフ・スタイルの相違」がアイデンティティ形成に深く関与するといった、これまで指摘されてきた女性特有の発達の視点に重なる部分も見られた。しかし一方で、シングル女性においては、コミットメントの対象が仕事や趣味などの人間関係以外に向けられている人もいれば、恋人・友人・母親・きょうだいなどの様々な関わり合いの対象に向けられている人もおり、「親密な関係性」や「個と関係性」の視点というだけにとどまらず、各々の置かれた環境や関心によって「より自分らしい自分になる“Becoming One's Own Woman (Man)”」(Levinson, 1996) という「個体化 (Individuation)」のプロセスを通じたアイデンティティ形成の様相がより特徴的であると思われた。

しかし、課題として残されたこともある。30歳移行期以降のシングル女性がその後の人生をどう歩んでいるかということである。つまり「シングル」ということに焦点を当てるとするならば、30歳移行期をシングルで通過した女性が、本当の意味でシングルを意識し、結婚、出産、仕事などにおいて差し迫った選択を迫られるようになるのは、Sheehy (1973) が「締切の世代 (The Deadline Decade)」と呼んだ35歳頃、またはそれ以降の時期ではないかということだ。つまり、そこにスポットを当てることで、「シングル女性」のアイデンティティ形成の実態が、よりはっきりとした輪郭を持って見えてくるのではないかと考えたのである。

そこで今回、前回では取り上げなかった30歳移行期以降から中年期への移行期の間、つまりおおよそ32、33歳以降から42、43歳の女性たちについて、代表的な先行研究ではその時期がどのように取り上げられているのか、またシングル女性についてはどのように取り上げられているのかを、改めて振り返ってみたいと思う。

2. 第1成人期の位置づけ

アイデンティティの問題を病理的なものだけでなく発達のなものとして捉え、生涯発達における経路を示したのは、Erikson (1950) が最初である。そしてその発達の課題を8段階に分けた図が、Erikson の精神分析的個体発達分化の図式 (Epigenetic Schime) である。しかしその後、Levinson が成人期についてのさらに詳しい生涯発達研究を行い、成人期におけるアイデンティティ研究は徐々に増加し始めた。Levinson は研究の成果として、成人期に関する新たな見取り図を作ったが、以下の図は、彼が発達段階の図式として示した図の一部を抜粋したものである (図1)。

本研究では、成人期発達研究の先駆けであるLevinson の発達段階の図を参考に、おおよそ「30歳移行期」以降～「中年期への移行期」以前までの女性たちを、詳しく取り上げていく予

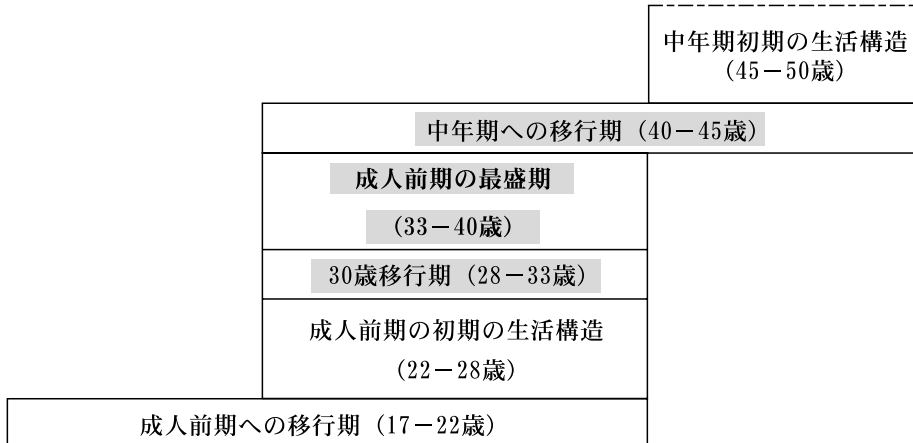


図1 成人前期から中年期における Levinson (1978) の発達段階の図の抜粋

定である。ここで取り上げる3人の研究者、Levinson、Josselson、Sheehyは、その時期の女性たちについて詳細で質的な研究を行っている。しかし研究者によって、その時期の呼び方や期間、そして研究の視点などに多少のずれや違いなどもみられる。そこで、まずはこの時期における、3人の研究者の視点や特色について少し整理しておきたい。

Levinson (1978) は人生を、誕生から死にいたる過程である「旅 (Journey)」と、生活構造の質的な転換が起こる「四季 (seasons)」という概念でとらえ、当初、成人男性のライフサイクルについて著書を執筆した。そしてその約20年後に“Seasons of a woman's life” (1996) を出版し、女性のライフサイクルについても検証を行った。彼は成人期を、大きく成人前期、中年期、老年期の3つに分け、それぞれの季節において生活構造が再編成される時期を「移行期 (transition)」と呼んだ。移行期における主要な発達課題は、1) 現在の生活構造の終結、2) 個体化、3) 新しい生活構造の開始、の3つである。そして「より自分らしい自分になる “Becoming One's Own Woman (Man)”」、つまり「個体化」することでさらに相互的な関係が可能になると考えた。

Levinson は、30代前半から40代前半における時期について「この時期の課題は、移行期に

築き始めた新たな生活構造の確立と、自らの人生をさらに高めるために、もっと自分自身になることである。この時期には、大人の世界で初心者からより一人前になることが求められる。そして大きな困難の時期であると同時に、個人的な成長や発展が望める時期である」と位置づけている。

一方 Sheehy は、Levinson が「30歳移行期」以降～「中年期への移行」以前を「成人前期の最盛期」と呼んだのに対し、30 - 45歳の期間を本格的な成人期のはじまりという意味で「第1成人期 (First Adulthood)」と設定した。彼女は成人期を大きく、1) 仮の成人期 (Provisional Adulthood): 18 - 30歳、2) 第1成人期 (First Adulthood): 30 - 45歳、3) 第2成人期 (Second Adulthood): 45 - 85歳以上、の3つに分けた。そして、ある時期からもう一つの時期への移行期を「パッセージ (Passage)」と呼んだ。それは成長にともなう新しい課題が持ち上がると同時に、自分にとって心地よいと感じられた馴染みの感覚を捨てる試練の時期でもあり、その時期を乗り越えられると望ましい成長が期待できる時期だとした。

Sheehy によると、「第一成人期 (30 - 45歳)」は、「35歳の棚卸し (Age 35 Inventory)」と「激動の30代 (Turbulent Thirties)」という言葉にその内容が表されている。繁栄の40代へと向かう

道の途中で「35歳の棚卸し」は起こる。Sheehyはそれを、実体験も交え「内的な変化に伴う、混乱の時期」とした。きっかけとなる外的な出来事は人それぞれだが、この時期には自らの有限性を感じさせるような出来事が多くの人に起こってくる。そういった中で、これまでの自分の人生を再検討し、外側・内側の両面から自分自身の人生のバランスを取り直していく時期が「第1成人期」における課題だと捉えたのである。

最後に挙げるのがJosselsonである。彼女は心理学者であり、個人面接とその事例を数十年に渡って縦断的に分析することで、女性の成人期の発達における「内的」な変化に注目してきた。Josselsonは、20代の大学生であった女性達を40代になるまで追跡し、丹念に調査している。その研究のポイントは、あくまでも心理学的な見地から、多くの女性たちがどのようにアイデンティティを形成していくのかを、独自のアイデンティティ・ステータス理論やライフ・スタイルの違いなどから追ったところにある。

彼女はLevinsonやSheehyのように、発達段階について特に名前をつけているわけではない。しかし30代から40代へ向かう女性たちに「物質的な価値観」から、より「内的な価値観」への変化が起こること、20代の表面的な変化に比べ、30代はより本質的な変化を伴うこと、そしてその時期には様々な困難さが経験されることなどを指摘し、その時期の特徴とした。

以上のように3人の研究者について、それぞれの視点や特徴などを挙げてきた。この時期の特徴として全員が指摘しているのは、20代での変化に比べ、この時期の変化は成人初期における、より本格的な変化であるという点である。また、それは困難さも伴うが、さらなる成長への可能性を含んだものであるという点も同じである。しかしこの時期の変化を他と区別する際の視点については、Levinsonはどちらかといえば生活構造の変化という外的な視点からその変化を捉えたのに対し、Josselson、Sheehyは

より内面的な変化に注目した点が少し異なっている。また、年齢の設定については、3人が示す時期はほぼ重なっていたが、Levinsonの「移行期」やSheehyの「パッセージ」など、ある時期から次の時期へ重なる移行期間があることなども考慮した上で、最も時期が重なる32、33歳から42、43歳の期間をその時期と捉えた。最後に、この時期の「呼び名」についてだが、「成人初期」における、より本格的な変化という意味を最もシンプルでわかりやすく表現したものとして、Sheehyの「第1成人期」という呼び方をこの時期の「呼び名」として、ここでは採用したい。

ではここから先は、研究者ごとにさらに詳しく、この時期の特徴についてみていこう。

3. Levinsonの研究

1996年、Levinsonは“Seasons of a woman's life”を出版し、女性のライフサイクルについても男性と同様の検証を行った。1980年代はじめに行われた綿密な面接調査は、30代半ばから40代半ばにある主婦、企業で働く女性、研究者の各15名を対象として行われた。その結果、女性のライフサイクルは男性のライフサイクルとその発達プロセスがほぼ同じであることが分かった。そして女性の発達プロセスにおいては、様々な面でジェンダーの問題が影響しているということも明らかになった。また彼は、生活構造が大きく入れ替わる「移行期」における主要な発達課題を、1)現在の生活構造の終結、2)個体化、3)新しい生活構造の開始とし、「より自分らしい自分になる“Becoming One's Own Woman(Man)”」¹⁾、つまり「個体化」することでさらに相互的な関係が可能になると考えた。そしてそのアイデアは、様々な役割を担う女性の発達プロセスにおいても、非常に重要な概念だと捉えていた。

対象者別にみると、主婦とキャリアウーマンでは特に青年期の選択からその相違が見られた。しかし危機は同様に訪れ、それぞれが各ス

ページで個と関係性の側面で新たな見直しを行っていた。ここでは、特にシングル女性に関する記述を中心に「成人前期の最盛期（33 - 40歳）」について見ていきたい。

「30歳移行期（28 - 33歳）」の時点では、1度も結婚をしていないシングル女性は7人だったが、移行期を通過した女性たちの内、4人のキャリアウーマンがシングルのままであった。この時期の課題は、結婚している／していない、仕事のある／なしに関わらず2つ挙げられる。一つ目は、「移行期に築き始めた新たな生活構造の確立」であり、二つ目は「自らの人生をさらに高めていくために、もっと自分自身になること」である。この時期は、20代で叶わなかった夢を達成したり、大人の世界で初心者からより一人前になることが求められる。そして大きな困難の時期であると同時に、個人的な成長や発展が望める時期でもある。シングルも含め、全ての女性たちがこの時期、仕事・恋愛・結婚・家族において満足と失望を体験していた。そして仕事と関係性の両方が自分自身の活力源になることを望んでいた。

しかしシングル女性の多くは、様々な面でシングルであるがゆえの内的な葛藤に悩まされていた。伝統的な女性の生き方を求める心の声と、反伝統的な生き方を求める心の声によってである。それは、その時の気分や状況によって左右されやすいものだったが、世間や周囲の人々、マスメディアなどからも多くの影響を受けていた。関係性の面でいえば、全員が30代の始めにロマンティックで真剣な恋愛を一度は経験していたが、それは結婚には至らなかった。もちろん、結婚や子どもを作ること自体を望まない女性もいたが、多くは結婚、そして子どもを持つことを望んでいた。しかし現実には彼女達の望むような男性はすでに結婚しているか、ほとんど残っていなかった。出産については、「生物学的な期限」が持ち出されることも多いが、それ以上に心理・社会的な面での影響の方が彼女達を圧迫していた。そして一生、子どもを持て

ないのではないかという不安は30代後半にピークを迎え、その喪失感に対処しつつも、個人的な成長の時期でもあるこの時期をシングル女性は痛みを伴いつつ過ごしていた。そして、その後やってくる中年期を意味のあるものにしようと考え始めるようになっていった。

仕事については、その他の女性たちと同様、より現実的に状況を見据えるようになっていった。ごく一部の女性のみが確実なキャリアへの第一歩を踏み出していたが、多くの女性たちは先の見通しが不確実で乏しかった。それに加え、シングル女性は一人である限り、退職を迎えるまで自らが生計を立てていかなければならないとも感じ始めていた。仕事の世界は厳しく、家族的な温かさは望めない。また出世できるチャンスは男性によってほとんど占められているため、必要最低限の生活を維持していくには、結婚するしか手段がないように感じられるときもあった。

また母親になるということも、多くの女性にとって自分の子孫を残すこと以上の意味があるようだ。女性にとって、母親になるということは家族を持つということであり、誰かを世話するということは、しばしば自分が「この世界に存在する」という確かな感覚の基礎となる。子どもを持たないということは、多くの女性にとって喪失感となり、内的な空虚さを感じさせる原因の一つとなるようだ。

以上のように、多くの女性にとってこの時期は、困難を抱えつつも自らを成長させ発展させることでさらに一人前になっていく時期といえる。そしてそれに加え、シングル女性にとっては、仕事の面でも関係性の面でも、様々な葛藤の中で自分と折り合いをつけていくことが必要な時期であることが Levinson の調査からは見えてきた。

4 . Josselson の研究

Josselson (1973) は当時、「いかにして女性は自らのアイデンティティを生み出し、様々な

選択肢から一つの道を選ぶのか」ということに強く興味を引かれていた。フェミニスト運動が始まろうとしていたアメリカで、彼女は大学4年生の女性たち30人を無作為に抽出し、インタビュー調査を行った。そして22年後に同じ女性たちを再調査し、1996年、その生き方を“Revising herself”(自分自身の改訂)にまとめた。JosselsonはMarcia(1964)のアイデンティティ・ステータスをもとに、女性たちを独自に4つのステータスに類型化した。1) Pathmakers(道を作る人): 自分のニーズと他者のニーズとのバランスを図るべく努力し、危機やコミットメントを恐れていない、2) Searchers(探求する人): 現在、選択に迷い苦しんでおり、何に対してもコミットメントできないでいる、3) Guardians(護る人): 「よい娘」のタイプ。家族の期待に応えるべく、物事をやり遂げる。外面的には頑なで、変化に抵抗している、4) Drifters(漂流する人): 刹那的に生き、漂うばかりで明日のことは分からない。自己選択もアイデンティティの探索も回避、の4タイプである。Marciaのステータスに置き換えるとすれば、1) Pathmakers(道を作る人)は「アイデンティティ達成型」、2) Searchers(探求する人)は「モラトリアム型」、3) Guardians(護る人)は「予定アイデンティティ型」、4) Drifters(漂流する人)は「アイデンティティ拡散型」に近いといえるだろう。

ここでは特に、“Revising herself”の中で取り上げられた、最初の調査から12年後の33歳になった女性たちと、22年後である43歳になった女性たちの記述を中心にみていきたい。

1983年に33歳になった女性たちは、そのほとんどが結婚しており、うち8人が母親になっていた。その時期の彼女たちの関心の多くは、「良い生活」を得るための物質的な価値観に注がれていた。何にでも挑戦できる、何でも手に入るといったことが、彼女達にとって成功のイメージであった。

また彼女達のほとんどは仕事をしていた。そ

してその多くが現在の仕事に落ちついてはいたものの、今いるポジションから先へは進めないように感じていた。出世の道が開けていると感じた者は少数で、多くは女性であるがゆえの差別や壁が存在するを感じ取っていた。

関係性については、結婚していない女性たちは、パートナーを探していた。また同時に、シングルで生きていくかもしれないという心の準備もしはじめていた。子どもを産んでいない女性たちは、時間がもうないという感覚に追い立てられていた(その当時、35歳で母親になることは、年を取りすぎていると考えられていた)。その多くは、将来子どもを持ちたいと感じていたが、子どもを持たないと決めた女性もわずかだいた。

22年後、1990年代に入り43歳になった女性たちは、自らの意志だけではどうにもならない運命の力といったものがあると感じはじめていた。例えば、愛する人の病気、経済的な問題、転職、願っても子どもが出来ないこと、などである。そういった困難さも、成長過程の中では受け入れ、統合していく必要があった。20代から30代にかけての変化が表面的なものであったのに比べ、30歳以降の変化は精神的な意味で非常に大きいものだった。一方、彼女達は以前よりも安定し、自分自身が何者であるかということ、より認識するようになっていた。しかし変化自体は内面的なものが大きかったため、表面上は捉えにくいものであった。

43歳の時点で、ほとんどの女性が仕事を持っており、そのうちの何人かは非常に成功していた。しかしそれ以外の者は、単に働いているだけだった。職場ではセクシャル・ハラスメントの問題もあった。何人かは仕事を辞めるつもりであり、それ以外の人も、もっと自分に合った仕事を探そうと考えていた。

彼女たちは以前に比べ、内面的なことにより関心を向けるようになっていた。自らが犠牲にしていること、家族が機能不全に陥っていること、自身のインナーチャイルドの問題について

も思いをめぐらせていた。また、多くの女性が前よりも保守的な考え方になりつつあった。経済的な安定を望み、健康を気遣った生活を送っていた。海外旅行や読書など、様々なことに関心を向けつつも、忙しくその時間が取れないことを嘆いてもいた。そして個々に不満は抱えつつも、自分は幸せなのだと言い聞かせようとしていた。

関係性についていえば、3人を除いた全員が結婚しており、関係性に深くコミットしていた。33歳以降、約半数の女性が子どもを産んでいた。子どものいない女性たちの中には、既婚者もいたし、パートナーと長年暮らしている者もいた。一般に子どもを産んでいない女性は喪失感があるのではないかと考えられているが、調査の結果は違っていた。彼女たちは、子どもがいないことを意味のある選択として捉えていた。彼女たちのアイデンティティは子どものいる女性と同様、関係性と深く結びついていたが、甥や姪、教え子たちなど、自分の子ども以外の次世代の子ども達をケアすることで、その気持ちは満たされていた。子どもを持たないことへのアンビバレントな感情や多少の後悔も感じられたが、それも自身の選択の結果として彼女達の多くは受け入れていた。しかし、“Searchers (探求するひと)”や“Drifters (漂う人)”の中には、子どもを持つ以前に、自分自身の葛藤が大きい人も多く、産むこと自体がまだ考えられないという人も多かった。それ以外の人でも、子どもを持つことを重荷に感じたり、自分の人生を制限するものであると考えている人がいた。

中年期までに、女性たちの多くは新たな生活構造を形成するために、それぞれのライフ・パターンによった選択を行い、現在の生活構造をさらに拡大、発展させようとする。そして子どもを産む/産まないに限らず、彼らを必要とする人々とのつながりの中で、自らのアイデンティティをより強く感じるようになる。

この調査から、Josselson は女性のアイデンティティ形成について、仕事やその他の活動か

ら有能感 (competence) を得つつも、他者との繋がり (connection) からアイデンティティを強めていくという女性の特徴を見いだした。女性には、そういった2つの流れに沿って自身を「改訂」し、アイデンティティを形成していく特徴があると考えたのである。

5 . Sheehy の研究

Sheehy (1974) は、アメリカ在住のジャーナリストである。彼女は1973年、18 - 55歳の中流階級にある健康なアメリカ人男女105人の生活歴を収集した。そしてそのライフサイクルの様相について研究した。彼女は成人期を大きく、1) 仮の成人期 (18 - 30歳)、2) 第1成人期 (30 - 45歳)、3) 第2成人期 (45 - 85歳以上) の3つに分けた。そして、ある時期からもう一つの時期への移行期を「パッセージ」と呼んだ。それは成長にともなう新たな課題が持ち上がると同時に、自分にとって心地よいと感じられた馴染みの感覚を捨てる試練の時期でもあり、また乗り越えられると望ましい成長が期待できる時期だとした。

ここでは彼女が「締め切りの十年」と呼んだ35 - 45歳の時期を中心に、その頃、多くの女性にとってどのような経験がなされているのかをみていきたい。また「35歳の棚卸し」として、35歳に注目した研究も彼女は行っているの、それについても取り上げてみたい。

まずはこの時期の前後にどのような時期があるのかを少し説明したい。20代は青年期の延長でもあり、かつ成人への参入が行われる「仮の成人期」である。次に古い自分から新しい自分へと脱皮したい衝動にかられる「抜きさしならない30歳」と呼ばれる30代へのパッセージがある。シングルのキャリアウーマンとして過ごしてきた女性の多くは、このパッセージで、感情的な愛着を誰か特定の人に感じたいと切望する。そして「第1成人期」である30代が始まる。その時期、多くの人は新しい家族を作り、その中で根づき、成長したいと願う。そこからさら

に繁栄の40代へと向かう道の途中で、「35歳の棚卸し」が起こる。Sheehyはその時期について、「人生の最盛期に近づいているにもかかわらず、その道の果てに何があるか見始める。自分の安全の源は自分で、他の人から許可を求める必要はもはやない。自分自身に許可を与えることを学ばなければならない」と語っている。

ではここから、さらに詳しく「締め切りの世代」を見ていこう。この時期における変化の感覚とは、Josselsonが30代から40代へ向かう女性たちが、その関心をより内面的なことへ移す、と述べたことに重なる部分である。それは目に見える具体的な出来事というよりも、自分の内部で起こってくる衝動のような感覚で、Sheehyはそれを「頭ではなく、内臓レベルの変化」だと表現した。さらに漠然とした不安は「厳然たる現実」にも裏打ちされている。鏡の中の自分の姿に老いの最初の陰りを確認し始め、急に時間が差し迫ってくるように感じられる。またこの時期、親や身近な人の病気や死などが個人的な経験として初めて体験されることも多く、それは自分自身の「死」についても考えさせられる瞬間である。

Sheehyは女性をライフ・パターンによっていくつかの型に分けたが、その代表的な型、「世話をし、面倒を見る型」、「達成を延期した型」、「養育するのを延期した型」、「統合型」などの全ての女性に、35歳になると自分の内部で今まで予期しなかった質問が寄せられるようになる」と述べた。今までの自分の役割を再検討し、新たな役割についてや、今まで脇によけておいた問題、老いが始まると出来なくなることなどについて、もう一度考え直すよう、内なる声が問いかけ始めるという。ライフ・パターンによって、内部から寄せられるメッセージは異なるが、それに対処する心の準備が整っている人は少ない。多くの人がこれまでの役割や価値観に変化が生じること、45歳以降の「第2の成人期」に向け、再びそれらを組み立て直さなければならないことについて恐れをいだくという。そして、

「転職したから気がめいる」などの外的な理由にそれらは置き換えられ、内的なメッセージは始め無視されるのだ。

Sheehyはインタビューする中で、多くの人にそういった類似性があることに気づいていった。外的な出来事に一貫性はみられないが、「心の中で起きる悩み」については多くの人に驚くべき一致が見られた。つまりほとんどの人にとって35 - 45歳の10年間は「第2成人期」へ向けての重要な時期であり、仕事、関係性などの様々な面で、これまで信じてきたことが力を失っていく時期でもあるのだ。しかし、そういった心境の変化を恐れない人はいないだろう。なぜなら現実と向き合い自分自身を再検討することは、これまで築いてきたアイデンティティを壊し、再構築することでもあるからだ。そういった過程の中で、さらに直面することが避けられてきたもう一つの「真実」が目の前に現れ始める。それは、「人はみな一人ぼっち」という感覚だ。Sheehyはその感覚について、「自分の中に存在していた安全感を提供してくれる人は実際には存在しない。自分はこの世に一人立つ人間であるということ認めなければならない」と語っている。つまり、どんなに親密な関係であろうと、他人とは同一の感覚にはなりえないという「真実」を認めなければならない出来事がこの時期には起こってくるのだ。そしてそういった内面の変化を受け入れつつ、「第2の成人期」に向け、自分自身への「全責任」を負うための予行演習をしていくのがこの時期の課題なのである。

さて、ここからはシングル女性の事例として、Sheehyが「養育することを延期した達成型」と呼んだ女性たちの事例を見てみたい。これは、1970年代にハーバード大学の経営学教授マーガレット・ヘニングが、アメリカの企業で社長ないし副社長の地位にあった女性たち25人の生き方を調査したものだ。Sheehyはそれらを分析している。調査された女性達はその当時においても、女性も才能を伸ばすべきだという理解あ

る父親のもとで育った。彼女達の本質的で重要な人間関係は20代のころに形成され、それは師と仰ぐ人物との関係であった。彼らは父親と似ており、自分のすべてをさらけ出せ、また支持してくれる存在であった。25歳頃に全員が「いずれ結婚しよう」と考えたようだが、35歳に達する頃まで全員が師と仰ぐ人に依存しつづけていた。しかしその時期突如として、「自分には優れた仕事の業績以外は何もない」ということに彼女達は気が付く。そして「女らしさ」に関する疑問が、急に首をもたげ始めたのだ。その後1 - 2年の試行錯誤をへて、彼女たちの半分は、知的職業に従事する男性と結婚した。一方残りの半数は、結婚できる相手とは巡り合わなかった。しかし、彼女たちは重要なことに気がついてた。それまで自分たちが社交と呼べる人間関係を全くもっていなかったということについてだ。ここで注目したいのは、女性たちが結婚したか、しなかったかという点ではない。その違いからは、大きな差は生まれなかった。しかし、これまでの人生において中心にあった価値観を変化させたかどうかという点については非常に重要であった。つまりその時期、価値観を変化させた者だけが、その後の人生を「幸福」だと感じていたのである。変化の必要性に気が付いた女性たちは、以前よりもっと社交的になり、自分たちが次の世代の師となっていくことにも喜びを感じるようになった。そして、以前よりもっと正直で自然に人と関われるようになっていった。以前はバラバラだった様々な要素が、バランスよく統合されはじめたのだ。

これに対し、同様の調査の中で、中間管理職の段階で出世が阻まれてしまった女性たち25人は対照的な結果であった。父親が養育過程で彼女たちの「女らしさ」を認めようとしなかったことに加え、彼女たち自身も特別な誰かと「親密な関係」を持つとはしなかった。そして最も特徴的だったのは、危機を認め変化することを自分自身に許さなかったことである。彼女達は、その後だれも結婚しなかった。師と仰ぐ人

に依存しつづけて、自らの感情的な側面、性的な側面、養育的な側面を表に出そうとはしなかったのである。

このような例は、中間管理職の女性たちに限らず、この時期を何事もなかったかのように通過しようとする他の人たちにも共通している。問題があるにも関わらず、それを無視して次の段階にいった場合には、同じような問題が次の段階でも再び頭を悩ませることになる。Sheehy自身は、この時期を自らと向き合い、現実や変化を受け入れることで見事に乗り切っている。

ここまで、「35歳の棚卸し」および「締め切りの十年」について、その様相を詳しくみてきたが、それは「締め切り」という言葉にも表現されるように、「仮の成人期」～「第一成人期のはじめ」に作り上げたもの、やり残したことなどに再び光を当て、自分の人生を外側と内側の両面から再検討していく時期といえる。それぞれの検討課題は選択したライフ・パターンによって異なるが、特にシングル女性にとっては「関係性」について、この時期、再検討することは避けられない課題のようである。しかし事例にもあったように、その解決法は必ずしも結婚や出産という形にとどまらない。目の前の現実を受け入れた上で、それについての外的・内的な価値観のバランスを、どう取り直すのかという点が非常に重要であるように思われる。

最後に、Sheehyの研究の特徴として挙げられるのは、「成人期の危機は予測できる“Predictable Crises of Adult Life”」とした点にある。彼女は表面上の出来事は個々によって異なるが、「心の中で起きる悩み」については、多くの人に共通したのがあるとした。つまりこの時期であれば「内的な変化の必要性とそれに伴う恐れ」などである。しかしそれが予測可能ならば、いたずらに落ち込んだり自分を責めたりするのではなく、人生に起こる必要なプロセスの一つとして受け止めることができるのではないかと考えたのである。さらにもう一つの特徴

は、ここでは詳しく取り上げなかったが、男女の成長のリズムの「ずれ」についてである。基本的な成長のプロセスは男女とも共通しているが、男女が同じ年齢で、同じ問題で悩むことは極めて稀だということが彼女の調査からは分かっている。そういったことが分かれば、夫婦にとっての予測可能な危機というものも検討できるのではないかと Sheehy は考えたのである。

6. 総合考察

ここまで「第1成人期」、およそ32、33歳 - 42、43歳の女性たち、特にシングル女性について Levinson、Josselson、Sheehy の研究をそれぞれみてきた。最後にそこから見えてきた「第1成人期」の特徴や課題、さらに今後の研究の課題として挙げられることについて述べていきたい。

まず、「第1成人期」の捉え方についてだが、20代の初期から作り上げてきた生活構造や価値観を、30代に入りもう一度根本から点検しなおし、40代の「第2成人期」もしくは「中年期」へ向けて様々な面でバランスを取り直していく、という意味では3人は同様の意見を述べている。

30代に入ると、多くの女性たちはそれぞれのライフ・パターンによって、ある程度決まったライフ・スタイルを確立しつつある。しかし表面上は形が整いつつある現在の生き方を、さらに自分のものとして受け止めていくためには、まだ時間も準備も足りないというのがこの時期の女性たちの本音であろう。また中には、現在の生き方に少し不満を抱きつつも、ただ漫然と日々をやり過ごしているという人たちもいるかもしれない。そういった状況の中、ふと「今の自分は本当にこれで良いのか、何か置き忘れてきたものはないだろうか」と内なる声がささやき始める。多くの人は、現在の自分の居場所や手持ちの札について確認し始め、そして急に何か新たなことに挑戦したり開始したりするには、もう年齢が遅すぎるのではないかと感じる

覚に襲われ始めるのだ。そういった感覚がピークに達するのが35歳頃だと Sheehy は言う。

シングル女性にとっても、「シングル」という現在の状況が35歳頃になると急に実感をもって感じられ始める。特に「結婚」に関しては、「出産」という意味も含めタイム・リミット感覚が徐々に差し迫ってくる。もちろん結婚していたとしても出産に関する問題は同様に存在するのだが、シングルでい続けるのかどうかという問題と仕事や関係性における様々な問題が複雑に絡み合い、より葛藤を大きくしているのだ。実際は出産についての医学的な猶予期間は10年以上残されているのだが、世間や周囲の人々、マス・メディアなどからの影響もあり、生物学的な理由以上に、心理・社会的な圧迫が彼女たちの葛藤を強めている。

そういった状況に対し、これまでシングル女性たちはどのように対応してきたのだろうか。Josselson の調査によると、子どもを産まなかった女性たちは、実際に世間でいわれているような「喪失感」をそれほど強く感じていなかったという。彼女達は、子どものいる女性と同様、甥や姪、その他の子どもたちを通じて関係性を以前よりも深めていた。自分の子ども以外の子どもたちをケアすることで、喪失感は埋められつつあった。また彼女達が、子どもがいない人生を「意味のある選択」として捉えていたということも重要な点である。Sheehy の調査においては、結婚するか/しないかという選択は、女性たちの「幸福感」に大きな差や影響を与えていなかった。しかしこれまでおざなりにしてきた価値観に光をあて、必要な変化を起こせたかどうかについては重要であった。それがその後の「幸福感」を大きく左右していたのだ。

また仕事についても、関係性の問題と同様、この頃は見直しの時期といえる。調査では、仕事で成功している女性たちも少数いたが、ほとんどの女性たちは、現在の仕事における地位や、その内容、また女性であるがゆえの壁や差別に気づき、何らかの行き詰まりを感じていた。シ

シングル女性にとって仕事は、生計を支える上でも、自身のアイデンティティを確かめる上でも、非常に重要な要素の一つである。しかし現実の厳しさを目の前にすると、ときに結婚がもう一つの選択肢のように思えることもあるだろう。そういった葛藤に揺れつつも、この時期、自分の中で仕事をどのように位置づけていくかを再考することは、シングル女性にとって必要な作業の一つだといえる。

シングル女性に限らず、全ての人にとって、この時期の課題は「外側・内側の両面から自分自身を見直し、よりバランスのとれた自分に統合していくこと」である。しかしシングル女性にとって、シングルという状況自体が問いを発するこの時期は、より大きな試練と成長の時期だといえるかもしれない。

一方、この時期の「課題」ではなく、「変化」の捉え方については、Levinson、Josselson、Sheehyの間には少し違いもみられた。Levinsonがどちらかといえば、生活構造の変化という「外的」な側面から変化を捉えていたのに対し、Josselson、Sheehyはそれに伴う「内面的」な変化に、より注目していた。さらにもう一つ付け加えるとすれば、女性は男性に比べ社会的・文化的な意味でも、「外的」な圧力によって自身の生活構造や内面を変化させ、適応せざるを得ないという側面が強い。そういった点も、女性の「変化」のプロセスに特別な影響を与えているといえるかもしれない。

さて、ここからは少し視点を変え、今後の課題について少し考えてみたい。まず、今回取り上げた3つの先行研究は、全てアメリカにおける研究であり、調査された時期も1970 - 1980年代が中心であった。女性のライフサイクルについて、また注目したかった30代前半から40代前半の女性の生き方について詳細な検討がなされていたため、その時期の女性の基本的な発達プロセスや内的な発達プロセスなどについては、理解を深めることができた。しかし、その内容を現在の日本のシングル女性にそのまま置き換

えようとする、時代や文化的背景、社会状況などの点で、純粋に比較するには難しい点も多い。例えば、平均結婚年齢の上昇やそれに伴う出産年齢の上昇、親に依存するパラサイト・シングルの現象、未婚化・非婚化の現象など、現代日本における社会状況やそれに伴う意識変化なども加味して検討していかなければ、日本のシングル女性の生き方を的確に捉え、分析することは難しいだろう。

さらにもう一つ、Sheehyが指摘した「男女の成長のリズムのずれ」を思わせるような、興味深い報告もなされている。30代以上のシングルは、結婚しない理由を「いい人がいない」とよく口にしますが、安蔵(2005)が2002年12月 - 2003年1月に東京都品川区の未婚の男女に行った調査によると、特に30代の男女の間に「結婚の意思や時期」、「結婚後の役割や家族観」に対する大きな考え方のずれが見られたという。つまり男性が結婚したいと思う時期に、女性側に結婚の意欲がなく、結婚後の家族観についても、女性が40代に向け、より現実的で自立した考え方を強めていくのに対し、男性は加齢とともに保守的な考え方を強めていく傾向が見られたという。そういった考え方の差は、晩婚化、未婚化、非婚化に拍車をかけると指摘されているが、男女の「成長のリズムのずれ」にも影響を与えているかもしれない。

ここまでLevinson、Josselson、Sheehyの研究から「第1成人期」の様相について振り返ってきた。それぞれを比較しつつ検討することで、この時期の女性のライフ・プロセスについて多くの視点から理解を深めることが出来たように思う。また同じ女性として、共感をもちつつこれらの内容を読み進めることが出来たということも、本省察の理解の一助になった。今後は、今回得た知見に新たに課題となった視点も加えつつ、日本のシングル女性についてさらに研究を進めていきたいと思う。

文 献

- Erikson, E. H., *Childhood and society*,. New York : Norton, 1950. (仁科弥生訳 『幼児期と社会』 1・2 みすず書房、1977年、1980年)
- Josselson, R. L., *Finding herself : Pathways to Identity Development in Woman*. San Fransisco : Jossey-Bass Publishers, 1987.
- Josselson, R. L., *Revising herself : The story of woman's identity from college to midlife*. New York : Oxford University Press, 1996.
- Levinson, D.J., *The Seasons of a man's life*. New York. : Alfred A. Knopf., 1978. (南 博(訳) 『人生の四季』 講談社、1980年)
- Levinson, D.J., *The Seasons of a woman's life*. New York. : Alfred A. Knopf, 1996.
- Marcia, J. E., *Determination and construct validity of ego identity status*. Unpublished doctoral dissertation. The Ohio University, 1964.
- 岡本祐子 『成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究』 風間書房、1994年。
- 岡本祐子 (編) 『アイデンティティ生涯発達論の射程』 ミネルヴァ書房、2002年。
- Sheehy, G., *Passages : Predictable crises of adult life*. New York : Dutton & Co, 1974. (深沢道子(訳) 『パッセージ : 人生の危機』 プレジデント社、1978年)
- 安蔵伸治 「未婚化、晩婚化、非婚化の実証分析 - なぜ「いい人」がいないのか - 」 『ESTRELA』 134号、統計情報研究開発センター、 2 - 11頁、2005年。